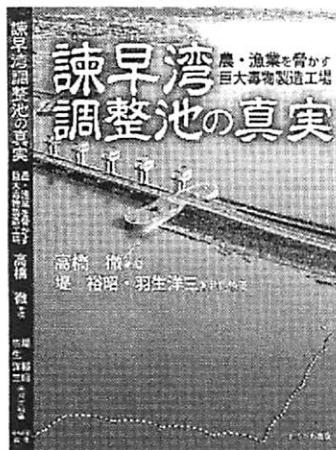


諫早湾の調整池 06年から研究・調査 熊本の教授ら現状出版



国営諫早湾干拓事業（諫早市）について研究している高橋徹・熊本保健科学大学教授（海洋生態学）らが「諫早湾調整池の真実」（写真）を出版した。事業の歴史や現状、国を相手取った漁業者らの訴訟、赤潮発生による被害をデータを交えて紹介。さらに、調整池（2600ha）に毎夏のように発生し、水面を緑色に染める浮遊性藻類の一種「アオコ」の危険性を指摘している。

高橋教授は「ある程度の規模で正確な疫学調査をしないと判断できない」としながらも、「影響が事実なら、（対策が遅れた）水俣病の再現になるおそれがある」と指摘する。

調整池の水は、潮受け堤防内で淡水化され、干拓地の農業用水に使われている。農林

「アオコ」の危険性指摘



高橋徹・熊本保健科学大学教授

水産省や県は「アオコはどこにでもあり、被害例はない」と強調している。共同筆者は熊本県立大環境との立場だ。だが、06年10月から池の水質調査を続けていた高橋教授は「野菜への毒素の残留が確認されたとする英の事例報告があり、大丈夫とは決して言えないはずだ」とは決して言えないはずだ

高橋教授によると、アオコが発生した南部排水門近くで、2007年12月に採取されたカキから、人体に有害な急性毒素を生み出すミクロシスチン（MC）が高濃度で検出された。同排水門付近のカキからは08年3月と09年11月にも高濃度のMCが測定されたといふ。

高橋教授は「ある程度の規模で正確な疫学調査をしないと判断できない」としながらも、「影響が事実なら、（対策が遅れた）水俣病の再現になるおそれがある」と指摘する。

共同筆者は熊本県立大環境共生学部の堤裕昭教授と有明海漁民・市民ネットワーク事務局の羽生洋三さん。A5判、152頁。1680円。かもがわ出版（075・432・2934）刊。

読書



かもがわ出版・1600円

長崎県の諫早湾は、1997年に農林水産省の干拓事業のために閉め切られ、今や農業用水をためる調整池という名のドブ池に変わり果てた。その調整池に毎年のように有毒アオコが発生、諫早湾に排水され、排水門直近の天然力キなどがアオコの毒素に高濃度に汚染されていることが著者らの調査で明らかになった。汚染の実態と行政の不作為を告発したのが本書だ。

アオコ毒は肝臓に影響し、最も毒性の強い種類の急性毒性は青酸カリの200倍。また、慢性的な毒性や発がん促進作用もある。

毒素が全て最も強い種類だとすると、体重50kgの人人が諫早湾の天然力キを2個ほど食べればWHO（世界保健機関）の定めた健康に影響がないとする量を超えてしまう。沿岸の人々は天然力キなどを日常的に食べており、著者が日常的に食べてしまふ。

アオコ毒は肝臓に影響し、最も毒性の強い種類の急性毒性は青酸カリの200倍。また、慢性的な毒性や発がん促進作用もある。

者は水俣病の教訓をふまえ、早急に地域住民の疫学調査をすべきだと提唱している。

たかはし・とおる 1954年生まれ。熊本保健科学大学教授（海洋生態学）。

高橋 徹 編

汚染実態と行政の不作為を告発

昨年末には、農水省や長崎県などに現状を通知、地元に沿岸の魚介類を食べないよう警告するなどの措置をとること、詳しい調査は行政で行なうことなどを要望したが、黙殺された。「アオコはどうにでもある」と農水省は言うが、責任を回避するため「だから安全だ」とは言わない狡猾さを著者は批判する。

今のところ、漁民の生活を支える養殖力キは問題ない。しかし、漁民がアオコ毒の危険を声高に叫べば風評被害を呼び込み、「自らの首を絞めることにもなりかねない」との著者の指摘は切ない。早く開門して海水を入れなければ汚染は諫早湾から有明海にも広がる。また、アオコ毒は農作物に残留する危険性もある。ムツゴロウなど希少な生物が棲息し、抜群の水質浄化能力があった諫早干潟を「巨大な毒物製造工場」にした農省と長崎県の罪は誠に重い。

評者 水尾俊彦 ルポライター